

研 究



バルカン諸國の歴史産業交通の概況 (一)

|| 經濟狀態道路狀況等について ||

H T 生

今や世界は一大轉換期に際會しつゝあるので、本誌が舊臘より連續して記載してゐる「近東諸國の歴史産業交通の概況」殊に道路交通等について更に筆を延はして、今春よりはバルカン諸國にまで及ぼすこととしたのは畢竟バルカンは今次の世界大戦ひいては大東亞戰爭……大東亞圏とも近き將來に於ては必ずや至大なる關係を保持するやうになるからである。

偕て茲にバルカンと言へば大體に於てアルバニヤ、ブルガリア、ギリシヤ、ルーマニア、ユーゴスラヴィア、トルコの六ヶ國を以てバルカンと稱するのであるが、この地方は現在まで歐洲の火藥樽若くは火藥庫といはれてゐる程に即ち危險なる地帯である。事實近世に入つても、千八百五十九年の佛墮戰爭、千八百六十六年の普墮戰爭、千八百七十年の普佛戰爭等も、このバルカン問題のために起つた

のであつたが、最も近い例としては彼の第一次世界戦は周知の如く、セルビアの一青年がオーストリー、ハンガリアの皇太子フランツ・フェルディナンド公並に公妃をサラエボで暗殺した事件から惹起したのであつた。併乍らこれは表面的原因であつて、實際はその當時のセルビアを繞る列強の角逐から起つたのである。即ち當時奥匈帝國の屬國たる地位から獨立國たらんとするセルビアを支持する當時の帝政ロシアと、奥匈帝國のセルビア牽制を支持する帝政獨逸との帝國主義的紛争から起つたる地政學的の重要性に基づくのである。

地圖を見れば明らかな如く、このバルカン半島は歐洲と亞細亞を繋ぐ要路に當つてゐる。又東地中海を隔て、阿弗利加大陸に面して、従つて交通上の要路のみではなく、戦略的にも重要性を多分に持ち、特に前記した近東諸國と小亞細亞を一葦帶水でつなぐダーダネルス・ボスフォラスの兩海峡と地中海は最も多大な軍事的重要で、従つて列強爭霸の中心地となつて居るのである。嘗て英國がロシアと千八百

五十五年から翌年にかけてクリミアの野で戦つたのも、柏林會議でロシアとの決裂を賭して争つたのも、英國の地中海制海權擁護のためであつたのみならず、曩の歐洲大戰で英露が共同して獨逸に當つたのも、畢竟獨逸の近東諸國への進出を妨げる意圖に外ならなかつたのである。現在に於てもこの全海峡と地中海の重要性は少しも變らないのである。黒海からこの兩海峡を通ふて地中海に出んとする、ロシアの野望は帝政ロシアから共產主義的蘇聯邦に變つても不變であると共に、近東に石油を求めて進出せんとする獨逸の東方政策も、亦帝政獨逸からナチス・ドイツになつても何等變らないのである。更ればこそこの兩海峡の軍備權と通航權を持つてゐる土耳其は、露、獨、英の外交戰の活躍臺になつてゐるが、殊に今次大戰勃發後の土耳其に對するこれ等諸國の活躍は非常のものである。

翻てバルカン諸國を軍事的に觀察すると土耳其を除く外、自國の實力を以て戰爭遂行するの能力を持たないのである。即ち最近獨逸に從服されたユーゴスラヴィアは人

口は優に千五百萬を有するが、陸軍平時兵力は十五萬戰時百十萬、軍艦二萬噸、空軍僅かに六十機に過ぎない有様である。更にブルガリアの如きは人口六百萬餘で陸軍平時兵力は十萬、戰時兵力二十萬乃至三十萬、空軍八十機に過ぎないのである。今次大戰に於て獨逸に征服されたギリシア

も亦人口六百九十萬で平時兵力六萬五千、戰時は六十萬、海軍は五萬噸、空軍二百機の如き状態であつた。斯の如き貧弱な軍備を以てしては當底近代戰に起ち得ないのは勿論全く一人立ちのできない子供の如きものであるから、所詮列強の援助がなければこれまで獨立國家になることが出来なかつたのである。かくしてバルカン諸國は列強の間に永久に右往左往するの運命を持つて居たのである。

今次の大戰に於けるバルカンの影響は獨逸のヴェルサイユ體制の打破であつた。即ち千九百三十四年聯盟脫退、千九百十五年軍備制限の撤廢宣言、千九百三十六年ライオンラント占領とヴェルサイユ條約の廢棄……ヴェルサイユ體制の打破を敢行したオチス、獨逸はバルカンでもそのヴェル

サイユ體制打開を自己の任務としたのであつた。而して獨逸のバルカン進出は先づ經濟的方面から進出し始まつて、獨逸合邦チエツコの併合後は獨逸はバルカンの對外貿易の約四〇%以上を占むるに至り、これに反して英佛側は僅かに夫々一〇%にも足りない状態になつたのである。

更に外交方面を見ても、千九百三十六年に獨逸は伊太利と同盟をして獨逸樞軸はバルカン諸國に對して壓倒的威力を示すに至つたのである。獨逸は千九百三十八年は獨逸合邦、チエツコ併合したが、伊太利も亦千九百三十六年にアルバニアを併合して、こゝに獨逸樞軸のバルカン進出は眞に驚くべきものがあつた。然るに英佛側は何等なすところを知らず全くバルカンに於ては漸くルーマニアとギリシア、土耳古諸國の安全を保障して、ヴェルサイユ體制の維持に汲々たるものがあつた。かくてバルカン諸國は英佛の無力に對する失望と獨逸攻勢の前に非常なる脅威をしてゐたところに第二次大戰が始まつたのである。千九百三十九年九月に獨逸軍のポーランド占領から翌年五月の西部戰線への

攻勢展開にいたる歐洲大戰の冬眠期には、バルカンは獨逸と英佛間の經濟戰が活發に行はれて、英佛側は海上對獨逸濟封鎖と共に戰時獨逸の食糧供給地たるバルカンの經濟を支配せんと力を致したのであつた。然るに獨逸の西部戰線

へ本格的攻勢が開始されると僅に一ヶ月餘にして佛蘭西を屈服させ、獨逸の壓倒的勝利に歸するとバルカン諸國は俄かに獨伊に靡き、英佛勢力は後退し始めたのである。かくて日を経るに従つてハンガリアが日獨伊三國同盟に加入したのを最初としてルーマニア、スロヴァキアと順次に参加したのである。更にユーゴスラヴィアとギリシヤは瞬く間に獨逸軍に席捲されて仕舞つたのである。大體かやうにして獨逸に依るバルカンの制覇は成つたのであるから、獨伊の意志に依つてバルカンの地圖は塗り變り變らるのである。只だ土耳其の今後に於ける動向は非常に注意さるゝのであるが、今や獨伊に依る近東、エヂプト戰線への攻勢は益々展開されて、若し要衝スエズの陥落成らんか英國の抵抗力は一層急角度に低下して英國の没落を一段と早めるで

あらう。大體以上に於て歐洲の火藥庫といはれてゐた。バルカンの概況を傳へたのであるが、偕てこれからバルカンの各國に付いて、その歴史産業交通の概況を見るに。

土耳其の歴史産業交通の概況

或人は土耳其についてかやうに云つてゐる……亞細亞と歐洲を抱き合うとする、彼のダーダネルス海峡に立つて、夏の夕暮に手を額にして向ふ岸を見れば、スタンブールの古い都は赤い大きな夕陽の光にくつきりと浮び上つて見える。名に聞えた丘の上にはそれ／＼の目星しい建物が見えて、その中にてセント、ソフィアの圓塔と神代杉の古木のやうな形をした回教の尖塔とがマルマラ海を威壓して立てゐる。脚下に灼爍と光る水は黒海から地中海へと急く琥珀の破片とも思はる、……この言葉は即ち土耳其が久しく占據したバルカンと小亞細亞とアラビアの歐亞交通の衝要の地たる土耳其の位置を指したものであるか、實に土耳其既往のオットマン帝國は歐、亞、阿三大陸の結合する位置を占めて印度洋と地中海と黒海とに面して東西兩洋の文化

鬭争の戰場であつたが、近世に於ては歐洲帝國主義の進出を眼下に見下して一喝よくその死命を制し得る地位にあつたのである。茲に土耳其の歴史を大略すると、全體トルコ人は唐の時代に於て次第に西漸運動を開始して中央亞細亞から裏海の北に移つたる人種的には韃靼人に屬するが、古い傳説に依ると蒙古人系を帯びて居るとのことである。而して次第に西に移つて、サラセン帝國の末期にセルヂウクと稱する一族が、バグダット王朝の傭兵となつて定着したが、間もなくこの傭兵が王朝を廢して自ら王位についたのであつた。後ちペルシアから漂流して來たオットマン・トルコが其の王位についてオットマン王朝を作つたのである。この王朝は自ら回教主と名乗つて、回教民族の精神上的の首長であると聲明して主權者は政權の淵源であると共に信仰の首長であつて、祭政一致の制度が嚴格に行はれてゐたのである。思へば十九世紀中程以後の土耳其は社稷の運命は危機一髪の状態に置かれて居つたが、現在までこの老帝國が遂に死滅しなかつたのは、畢竟回教の道義的勢力と

歐洲列強の相互牽制の結果であつた。ところが偶然にも曩の歐洲大戰に際して土耳其が獨逸側に左祖したことに依つてオットマン帝國の崩壞の第一歩となつたのである。即ち聯合國は佛國巴里に講和會議を召集して獨逸、ハンガリーの順序によつて平和條約を締結したが、土耳其に對しては休戰の状態で一年有半を過して漸く千九百二十年の八月にセーヴル條約が出来上つたが、この條約はトルコ内の反對氣勢が相當強烈であるために聯合國は武力を示して威嚇するの必要上遂に千九百十九年にギリシヤ軍をしてスマイル占領をせしめ、續いて翌年の春、英佛伊の三國軍隊がスタンブルを占領したのであつた。然して敗殘のオットマン帝國がセーヴル條約を承認すれば、事實上土耳其は歐洲から小亞細亞の一角に逐はれて獨立さへ出來ない有様になるのである。

土耳其人はこの時に當つて祖國救済のために一致結束して立ち上りてギリシヤ軍との對戰二ヶ年餘の後、土耳其國軍は奇蹟的の勝利を博して、ローザヌ平和會議に臨んだ

のであつた。而して千九百二十三年の夏調印された、この平和條約はオットマン帝國の崩壊を確認すると共に、土耳其人の住居する小亞細亞と東スレースを以て新しい土耳其人の安居と定めて、同時に歐洲列國はトルコに對して治外法權を放棄して平等對時の條約が出来たのである。かやうにして、アンゴラに本據を置いた土耳其國民黨は英傑ケマル・アタチュルクを選んで革命トルコの政治組織は獨裁的型式によつて出来上つたのである。土耳其國民黨は民主共和制の下に國民議會を以て政權の中樞として、回教を撤廢して信仰と言論の自由を認め、全部の法典を改正してローマ字を採用し、又義務教育を實施して服裝を歐化し、其の他税制を確立すると共に軍備の充實と産業を獎勵して、オットマン帝國の屍の中から新興土耳其を建設したのは實に近世史上の一異彩である。かくて土耳其の國權の基礎は強固となつたのである。

かくて土耳其の版圖については彼のローザレヌ平和條約に依つて歐洲方面ではマリツア河を境とする、東スレース

全部と亞細亞に於ては小アジアの全部とアルメニア地方を含んである。その面積は二十九萬九千平方哩にして大部分は亞細亞に屬する土地であるから土耳其は亞細亞にあると云へるのである。而してその地勢は小亞細亞の海岸地方は一帶傾斜地となつて次第に大陸に向つて隆起して居るか、海岸傾斜地帯には森林地帯と耕地が連續して氣候は中和であり、又濕度も適當である。高原の盆地に至ると雨量が減退して樹木少なく石灰質の禿山が一面にステツプと相對して全く落莫たる風光である。住民の九割までは遊牧民が土地に定着して農牧を營み、山羊、綿羊の飼育と麥、烟草の耕作に従事して居る有様である。千九百二十七年の人口調査に見ると土耳其の人口は約千三百九十萬となつてゐる。而して共和國建設以來は土耳其は單一民族國家を作つたと雖も尙ほ東方山地に住むキュルド人、シルカシ人を始め南方にはアラビヤ人、スタンブル附近にはギリシヤ、アルメニア、ユダヤの各民族が少數民族として住み雜多の分子を含んでゐるのである。

土耳其の産業は、一體この國は一見して天恵の資源に乏しい國であるが農本の國である。最近に於ては從來の農業本位の工業化を目指して居り、又鑛産物の開發と交通の完備とを主要としてこれに力を致して居るが、尙ほ依然として勞働者の八割位が農業と林業に従事して居るところを見れば未だ農業國の範圍を脱せないのである。而して過去十ヶ年間には耕作面積は約二倍に増加したやうであるが、その生産額は全國民所得の約三分の一に過ぎない状態である。輸出品の主要物は農産品なるが烟草が土耳其たばこと云つて主たるものである。土耳其の工業に至つては、紡績工場とセルロイド工場と板紙工場と國營の砂糖工場に依る位であるが、極めて最近に年産十八萬噸の鋼鐵工場がカラツプツクに建設され、ゲムリツクに人絹工場が出来て居るが、其他アルミニウム製造工業、ベンゼン抽出工業も漸次發達しつつあると共に發電所も出来て居る。土耳其の資源について調査したる報告に依ると、小亞細亞には鐵、銅、クローム等の鑛産物を始め石炭も多量に埋藏されてゐる。

亦鉛、亞鉛、モリブテン、アンチモニー、マグネサイト、硫黃等も産出することである。からこれを開發すれば將來土耳其の經濟的發展は相當見るべきものがあらうと思はれるのである。土耳其の交通状態を見ると、コンスタンチノーブルから移つた首都アンゴラには、議事堂も造られ、諸官署も建設され、病院、ホテル、百貨店から役人の官舎、圖書館等に至るまで凡ての建築は出来上つて、これに幅三〇米の新道路が坦々として古い街を崩して縦横に敷設されてゐるが、風が吹かなくとも自動車や馬車の走るにつれて萬丈の黄塵が濛々と立ち上る有様である。

全體バルカンの交通路は自然の形に従つて發達してゐるが、即ちバルカンは多島海からするか、北の平原地方からするかでないかと内部に接近することが困難であるが故に、主要交通路は南北貫通の道路である。これはバルカン半島の民族が外界に持出すべき多量の物資がないために交通の多くは歐洲から亞細亞、又は阿弗利加に通ずる通路としてのみ道路が開拓されたものである。彼の羅馬時代の道路で

ある。イグナチア道路と稱するものは、アルバニアの岸のドウラツオから東サロニカを経て、即ち土耳其の古都コンスタンチノープルに至つたのである。更にアルバニアの岸から東北に向つてダニューブに通ずる道路とダルマチフに上陸してサライエヴオの町を横切つて、東北に延長する道路も開かれて居つたのである。併乍ら一層これより主要の道路はサライエヴオから東南に向つて大體現在の鐵道幹線に沿つてソフィアと土耳其のコンスタンチノールを繋ぐ所謂幹線道路である。而してこれ等の各道路は東羅馬帝國の時代の土耳其が隆昌の時代においても、バルカンの政治的中心と歐洲とを連絡する重要な交通路であつたのである。しかしながら現在の土耳其國內の道路の建設は財政上の餘裕がないために極めて幼稚なるものであつて、地方には錦裝道路の如きは出来て居ない有様である。従つて土耳其の交通道路は産業開發と經濟的に關聯して見るとこれからである。さり乍ら土耳其がこれまで疲勞困憊の極に達してゐたのに拘らず獨立を救ひ得た現在に於ては、土耳其の

識者達ちは先づ第一に國民生活の安定と民力の休養とで獨立の維持も國威の發揚も先決問題は、畢竟自國を強くするにありとの下に一致して、これがためには絶対に戰爭参加を避けねばならぬとの見解を持つてゐる。僥へば紀元四世紀の初頭に當つて東羅馬帝國がスタンポールに都を選定して以來、約千年間の所謂ビザンチンの文化發祥の地であつたが、土耳其はこの古都を幸門と呼んでボスポラス海峽とマルモラ海とを眼下に見下して黒海の出口を扼して、亞細亞と歐洲との聯絡の重要衝路に當つてゐるところであるが、土耳其政府がアシゴラに遷都以來その人口は半減して現在では約七十萬となつてゐる。併乍らこの土耳其のスタンポールは經濟的にも亦軍事的にもこれを掌握するものは近東諸國に王たる地位に置かるゝものである。曩ては大東亞の建設となり、印度は英國の脚絆から脱して樞軸國家群に依つて亞歐を結ぶ時代が到來するのであるが、この時こそ土耳其……スタンポールは亦々一層の主要性を帯びて來る場所なのであると思はれる。

ルーマニアの歴史産業交通の概況

バカルン民族の解放はナポレオン戦争の時代に始まつたのであるが、先づセルビアとクロアートの比較的的自由なる國境區域の農民が起ち上がり、次いでギリシャがその獨立を獲得したのであつた。然るにルーマニアの領域は幾部分

は獨立狀態に止まつて、臆て露國の支配下に陥つたが、千八百五十四年から同五十九年に互る、クリミア戦争の結果は再びこの支配から脱出したのであるが、千八百五十九年來からルーマニア國家は實に長い間混沌裡に形成されてゐて、其の完全なる獨立は千八百七十八年の伯林會議で漸く認められたのである。元々ルーマニア人には古代羅馬の植民の子孫であるとの信念を持つて居るものが相當にあるが、夫れにしてもルーマニアの前身であるモルダヴィアとワラキアは中世以後に於て土耳其、ハンガリー、スラヴ、獨逸等の諸民族に征服されて居つたが、ルーマニア民族としての存在は續けて來たのである。この國に對する土耳其の支配は約四百年間は續いたのであるが、その残した

足跡は物質、精神兩方面にも何等認むるところがないのである。ルーマニアの統一についてはオットマン帝國の崩壊と奥匈國の分解が必要であつたが、それが曩の世界大戰後に於て實現して同時に又新ルーマニアが一躍してその版圖は二倍になつたのであつた。

ルーマニアの地形と人口を見ると地形は半分程ヨーロッパに位して、南半分はバルカンに屬してゐる。即ち東は黒海に面して東北はドニエストル河を隔て、蘇聯邦と境を接して居る。而して南はブルガリア、獨逸に征服された。北はポーランド西はユーゴスラヴィアとハンガリーに接して居つたのである。而して本來のルーマニアはヴァラキアとモルダヴィアの二州と千八百七十九年に締結された伯林條約に依つて獲得したドブルージュヤから成立したのであつたが、曩の世界大戰の結果蘇聯からベッサラヴィアを奪回し、又プロビナをオーストリアから獲得するに加へてハンガリーからトランシルヴァニアを併合した結果、二十九萬五千方呎の面積を持つやうになつたのである。人口に於て

も元々のルーマニアの人口は僅かに七百八十九萬餘に過ぎなかつたが、新興ルーマニアは新に千九百六十五萬を包容して茲に一躍バルカンにおける第一の大國となつた次第である。併乍らこの新興のルーマニアはこれがためにハンガリー人百六十萬、ユダヤ人百三十萬獨逸人七十五萬、ブルガリア人二十萬、ロシア人十萬と云ふが如き多數の異人種をその國境にもつこととなつて一層複雑なる内政問題の基因を成したのである。

偕てルーマニアの經濟狀況と資源問題を觀察するに當つて先づ獨逸伯林の景氣研究所長である、エルンスト、ワীগマンはその著「バルカン」に於てバルカン諸國の經濟諸問題について論及して居るうちで、……經濟的に觀察してバルカンがどのやうな發展段階にあるかと云へば、資本配置についての數字、その土地の建物並に財産配置についての數字を見れば大體判明する。國民經濟上の財産といふ場合、家畜狀態を別としても交通機關、軌道、街路、機械及製作品土地の耕作狀態及び穀物、更に灌溉施設、穿鑿塔等

々と云ふが如き經濟裝置を考へるのである。資本配置の程度はこれらの物の價格についての數字が探求されるなら容易に明かとなる。即ち機械消費或は機械の輸出入、軌道の長さ、貨物自動車の狀態等を國際的に比較して觀察すれば或る程度の結論が與へられるのである。バルカン諸國の千九百三十五年乃至三十七年の平均で、人口の頭割機械輸入はブルガリアの二・六五マルク、ギリシャの一・八〇マルク、ユーゴスラヴィアの一・〇九マルク、トルコの一・二四マルクであるが、ルーマニヤは一・七八マルクとなつてゐる。これの中歐及び西歐の機械消費に比較すると少くとも十倍も少ないのである。更に鐵路の長さは百平方秆當りについて千九百三十九年にはアルバニアでは〇・一料、ブルガリアでは三・二料、ギリシアでは二・一料、ユーゴスラヴィアでは三・八料であるが、ルーマニアでは三・八料となつてゐる。この數字は中歐並に西歐に於ては約三倍若くは四倍となつてゐる。貨物自動車狀態についての數字も、百平方秆當りに千九百三十七年にはアルバニアでは

三・〇臺、ブルガリアでは四・〇臺、ギリシアでは一・〇臺、ユーゴスラヴィアでは六・〇臺、ルーマニアでは八・五臺となつてゐる。貨物自動車の状態は西歐並に中歐ではバルカンよりは十倍乃至二十倍も多いのである。而してこの數字の比較はバルカンに於ける國民經濟的發展の程度が弱いことをはつきり現はしてゐる。バルカン半島は半資本主義國と云はれてゐる經濟領域と同列に立つてゐる。

この型を特にはつきり具體化してゐる、印度と支那は、より高い人口密度とより乏しい資本配置をもつてゐるが、バルカンでは人口過剰で資本化が低いのである。換言すれば技術化が低いと言はれるのである。かくてバルカン國家の經濟政策は土地の資本配置を高める有ゆることを行ふのを目標としたのである。このことは先づ第一に工業化の手段によつて達し得られると考へられると、云つてゐるのを見ても大體バルカン諸國の經濟狀況を觀測することが出来るのである。

併乍らこのバルカン諸邦中に於て最も自然に恵まれてゐ

る國はルーマニアである。ゴム、棉花、鐵の外は凡ての原料品が自給自足の状態にある程で、石油年産額は千九百三十八年の統計では六百六十萬噸に達するといふ狀況である。近年ルーマニアの輸出は石油が四割乃至五割を占めてゐるのに徴しても、石油資源がルーマニアの重大寶庫であることを裏書さるゝのである。石油採掘に従事する勞働者の數は二萬五千人程であるが、國民所得の四割以下に當る程度で石油事業の九割までは外國會社に依つて採掘されてゐる有様である。併乍らこの石油資源は既に半數以上も採油されて今後有利なる油井は少ないとのことである。過去に於て石油事業に對する外國投資額は總額約百億レイに達するのであるが、この内英國と和蘭とが合體して資本三割六分、佛蘭西は一割六分強、米國が一割強といふ割合になつてゐる。其他の鑛産物は石炭とボーキサイドが主要の地位を占めてゐるが、黒炭の埋藏量は三千三百萬噸、褐炭三十億四千萬噸、ボーキサイド二千六百萬噸といふ豊富な資源を持つてゐる。亦銅、鉛、錫等についても相當

資源があるやうであるが、調査の不完全のために確たることは判明せないが、金の採掘量は千九百三十二年には三千九百四十一年には六千九百に増加してゐる。又農産物については玉蜀黍がその輸出高に於てアルゼンチンに次ぐ世界第二となつてゐるが、小麥も亦その收穫に於て年産約四百六十萬噸に達し、政府は小麥輸出補助金を與へて作付段面積も逐年増加してゐる状態である。又烟草と甜菜糖についても生産に對して保護を與へてゐるが、輸出額は巨額ではない。併乍ら最近では工業原料品、殊に向日葵、大麻、亞麻等の植付を奨励し、又家禽、果實、牛畜等の増産にも努力を拂つてゐる。殊に畜産は近年急速に發達して來たが、千九百三十五年の調査では牛は四百三十萬頭、馬二百二十萬頭、羊は千八百八十四萬頭と計算されてゐる位である。又木材もルーマニアの重要な輸出品であるが、夫れは同國の森林地帯が併合獲得以前のルーマニア國の面積十一萬四千平方哩に對してさへ三割もあるからである。千九百三十七年の如きは木材は總輸出高の九%を占めてゐる有

様である。而して從來に於ては無方針に森林伐採したのであるが、最近に於ては國防上の見地から政府はその森林地帯の六割以上に伐採禁止令を出したのである。兎も角ルーマニアは中歐に於ても稀に見る豊富なる木材資源を保持してゐる國である。ルーマニアの交通状態に至つてはこれを歐洲の獨佛英の如き國家に比ぶるとまだ第一流三流と云つてよいのである。國內に道路が四通八達して恰もその道路が坦々として砥の如き道路とは行かないのである。併乍らバルカン諸國中に於て貨物自動車の所有量はギリシヤに次ぐ第二を持つてゐる。此等の貨物自動車は凡て國內に於ける貨物輸送に使用されてルーマニアの經濟産業關係と結び付いてゐるが、鋪裝道路に付いては主要都市には出來て居るが、地方に通ずる所謂田舎道路はその施設は未だ完全とは行かなく、降雨の際には相當泥濘となる箇所も多いのである。大體ロシアの南方道路と大差ないといへるであらう。

最後にこのルーマニアには歐洲の社交界に一大衝動を與

た事件があつた。これはカロール二世は最初ヂヂ・ラムブリノと云ふ秀麗の佳人と結婚して一子を擧げたが、この結婚について、宮廷内と政府は絶対に反対したので正規の皇太子妃としてギリシアの王妃エレンが迎へられてその間に現在の皇太子であるミカエルを生けたのであつた。ところが、千九百二十三年に皇太子カロールはシナヤの避暑地でユダヤ系の一婦人であるマグダ・ルベスタといふ婦人と知合になつて、それがルーミアの政治に一大波紋を興へたのである。ルベスク夫人は父方はユダヤ人であつたが、信仰としては羅馬正教で育てられたのであるが、皇太子と知合になつた頃には某將校と結婚して居たが皇太子の知遇に感じて即時離婚の手續をとつて、ブカレストの宮廷に近いアレキサンドリア街の小さな二階建の煉瓦家に住んでゐたのであつた。カロール二世はこの婦人のために千九百二十六年に皇位繼承の權利すら放棄して海外に亡命しただけではない、エレン妃殿下との結婚も解消したのである。この結果、千九百二十七年に國王フェルヂナレド崩御の後ちは一

時幼少なるミカエル殿下をルーミアの王位に据ゑて、攝政を置いて國政をとるといふ變態的政治が行はれたのである。然るに農民黨の首領マヌーは英斷を以て千九百三十年にカロール二世を海外亡命先から迎へて復辟を實行したのである。その際にルベスク夫人の勢力を政治上に及ぼさないといふ誓約をカロール二世に求めたのである。併し復辟の情勢は必ずしも穩便には推移しなかつたが、ルベスク夫人は頗る賢明の婦人であり亦愼み深い性格であつたが、彼女を利用せんとする政客の一派は兎角彼女を圍みて國政に勢力を揮はんとする企てがあつた。反對黨はこの婦人の理由を以て猛烈に國王を攻撃する有様である。心ある政客は屢々王に進言したが、遂に千九百三十八年に至つてルベスク夫人はブカレストを去つてスイスに旅立つて仕舞つたのである。この婦人については色々批判を書いてゐるが、品行方正の地味の婦人である。カロール二世に對して頗る忠實であるが、決して正式の結婚を求めなかつたのである。カロール二世は獨逸貴族の血と英國皇室の血とを混へてラテン文化

に育てられた人である典型的の元首型であつて。又聰明で幾分變態的ではあるが、隣國ブルガリアの國王と共にカール二世は歐洲に於ける優秀の明君であるといはれてゐる。これが現王カール二世の戀物語りと共に嘗て歐洲社交界に一大衝動を興へた挿話である。

この稿を書き終つた最近のアンカラからの海外電報は最近に土耳其政府と蘇聯との間に於いて新外交協定締結の交渉が進捗しつゝあることを傳へてゐたが果然チューリツヒ外電は土耳其蘇聯間の新協定の内容として。土耳其蘇聯兩國の親善蘇聯をしてダーダネルス海峡を含む土耳其の領土保全を保障せしめること、並に土耳其が他國から攻撃され

た場合に於ける蘇聯の對土援助等であつて、土耳其の對英米接近の現はれとして重視してゐると傳へて居るが、この問題は相當に重視するの必要がある果して土耳其が聯合國側と接近して以つて土耳其の領土保全が保たれようか賢明なる土耳其の當局者達は土耳其をして飽くまでも嚴正中立を維持せしめ以つて土耳其の國內的發展に全力を傾注して以つて戦後世界の新秩序建設後に所する意圖にあらざるなきかを偲へば土耳其は曩の第一次世界大戰に参加して最も苦き經驗を痛烈に受けて居るまでも係るこの二の舞を漁することはなさないであらうと筆者は觀測して居る。

君が代を思ふ心のひとすぢに吾が身

ありとはおもはざりけり

梅田雲濱

身はたとひ武藏の野邊に朽ちぬとも

とどめおかまし大和魂

吉田松陰